

「日本3.0」

Vol.24

日本の未来を考えるための三冊

text by Norihiko Sasaki

文 佐々木 紀彦

先日、「日本の未来」を考えるための本を紹介してほしい、とのお題を頂戴し、全国紙に寄稿しました。その内容をご紹介します。

日本の未来を考えるためにまずやるべきは、先人に学ぶことです。

今、われわれが直面している問題は未曾有のものです。人口減少がその典型と言えます。しかし、先人が書いた本を読めば読むほど、「時代は移ろって、その根っこにある日本のクセは共通しているなあ」と痛感します。

そうした日本と日本人の「悪いクセ」

を簡潔に記したのが、福澤諭吉の『現代語訳文明論之概略』です。私は20代後半に留学した際、無性に日本について知りたくなって、日本論を読み漁りましたが、いちばん説得力があったのがこの本です。なぜ日本人は議論が下手なのか。商売やお金をさげすむのか。個として優秀であつても徒党を組むとなぜ愚を犯すのか——そうした問いに明確な答えを与えてくれます。

日本を知ると同じくらい大事なのは、世界を知ることです。日本は独特の歴史と文化を持った国ですが、世界の影響を強く受けてきました。それはこれからも変わりません。

モイセス・ナウムが書いた『権力の終焉』は、世界の趨勢を占う上でのヒントにあふれています。国際政治学者の著者は、「なぜ今、これまで圧倒的な力を誇った権力が衰えているか」をテクノロジーや国際環境などの視点から読み解きます。本書を読めば、日本においても、大企業、政府、大学といった権威や、政治家、経営者、先生といった権力が衰えている理由がよくわかります。

ます。

日本と世界について知った上で、最後に大事なものは、未来のビジョンを持つことです。

バブル崩壊後の平成の時代において、日本は国としての物語を失ってしまいました。そんな日本に久しぶりに登場したビジョナリストが、筑波大学准教授の落合陽一氏です。彼が書いた『日本再興戦略』を読むと、AI、ロボティクスといったテクノロジーを正しく使えば、日本の未来は決して暗くないことがよくわかります。人口減少すらもチャンスになるのです。

ただし、テクノロジーはあくまで手段であり、その根底には思想と行動が不可欠です。近代的な正解を疑い、東洋思想を見つめ直し、拝金主義から脱却し、自分なりの歴史や意志を持つ。その上で「手を動かせ。物を作れ。批評家になるな。ポジションを取った後に批評しろ」という落合氏のメッセージをどれだけの人が実践できるか。そこに日本の未来はかかっています。



Profile

NewsPicks COO (チーフコンテンツオフィサー)

1979年福岡県生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業、スタンフォード大学大学院で修士号取得(国際政治経済専攻)。東洋経済新報社で自動車、IT業界などを担当。2012年、「東洋経済オンライン」編集長に就任。2014年7月からソーシャル経済メディア「NewsPicks」の編集長を務めた。2018年4月より現職。著書に『米国製エリートは本当にすごいのか?』『5年後、メディアは稼げるか』『日本3.0』がある